

## J.-J. ルソーと合自然の教育(II)

コ ン ペ ー レ 著  
空 本 和 助\* 訳  
宮 本 光 雄

### Une traduction de “J.-J. Rousseau et l’Éducation de la Nature” de Gabriel Compayré (II)

Wasuke SORAMOTO  
Mitsuo MIYAMOTO

#### 目 次

はじめに (訳者)

序 文

第 I 章 ルソー教育思想の独創性

第 II 章 ルソーとその思想的背景 [以上第26号]

第 III 章 ルソーの根本思想と消極教育・家庭教育・道德教育・宗教教育論 [本号]

#### 第 III 章 ルソーの根本思想と消極教育・家庭教育・道德教育・宗教教育論

「一般の読者よ、私のパラドックスを許してくれたまえ。」とルソーがどこかで叫んでいる。そのパラドックスを許す最良の方法は、パラドックスが包含している真実の核心をそのパラドックスから引き出そうと試みることである。われわれはひとたび、この思考の魔術師が好んで彼の思考体系の本質的原理を包みこんでいる歪曲した形式を取り除いてしまった後は、われわれに残されているのは、現代の教育がもはや放棄することのできない『エミール』の中の一般原則と明確で疑う余地のない独特な真実とを集めることであろう。「人間は自由なものとして生まれている。しかもいたるところで鉄鎖につながれている。」と『社会契約論』(Contrat social)の冒頭で述べている。

「人間は善良なものとして生まれている。しかもいたるところで墮落している。」これが『エミール』の序文の意味である。

ルソーは、このような絶対的な断言を好む。即ち、彼は注意をひかずにはおかない断定的で簡潔な決まり文句を好むのである。

---

\* 広島大学名誉教授

彼の政治上の詭弁である「人民の一般意志は常に正しい」ということと、彼の心理学のもう一方の詭弁である「自然は根源的に善である」ということとは一致している。

これが『エミール』の中のすべての間違いを引き起す第一歩の誤りである。ルソーは現実の社会を批判するときは、最も辛辣で最も鋭敏な悲観論者であるのに、人間の事業を超えた神の事業、即ち自然の事業を考えると、最も甘い楽観論者である。

自然は善良であり情け深い。ただ長い退廃にすぎないいわゆる文明の影響によって、ゆがめられ、墮落させられ、傷つけられ、ごまかされない限り、自然の創造物は純粹である。この点について、ルソーは同時代の多くの人々と一致していた。ドルバック (D'Holbach)<sup>1)</sup>は、「人間は墮落させられたから墮落するのだ。」と言い、またディドロ (Diderot) は、「自然人が生存しつづけていた。しかるにこの自然人の中に人為的な人間が持ち込まれたのだ。」と言った。ルソーは、あくまでもこのようなテーゼにもどろうとするのである。「自然の最初の動きは常に正しく、人間の心の中には根源的な悪は何もない、……すべての性格は、それら自身では善良で健全である、……自然には誤りは何もない、という議論の余地のない格言を打ち立てようではないか。……」

恐らく、人は、ルソーをただちによびとめて、人間は本来善良であり、社会、即ち、人間の事業は悪であるという、このはなはだしい矛盾の説明を彼に求める権利があるであろう。……ところがこの矛盾は彼を困らせはしないのである。好評を博しはじめた二つの『論文』の中で彼が述べている意見を忠実に守って、彼は自分のユートピアを固執している。仕来りと偏見をもっている社会は嫌悪すべきであり、ゆがめられている、それは全く改められねばならない、と彼はあらゆる形で繰り返し述べている。自然の権威を復活させて、非常に古く時代遅れになった伝統の支配をそれに代えようではないか。人間の能力を不具にし、畸形にするきびしい規律と圧迫的な拘束の支配と、人間能力の開花の助けとなる若い人々の自由な主権とを交代させようではないか。

そのような挑戦をあらゆる人間の制度に投げつけることによって、ルソーは単なる教育学上の改革以上のものを望んでいたのである。即ち、彼は社会革命を宣言していたのである。彼は、まさに、革命家たちの父であり、やがてその偶像となるであろう。1788年に、マラー (Marat)<sup>2)</sup>が『社会契約論』を読んで、熱狂的聴衆の喝采を博したことを忘れないことにしよう。

教育的見地からすれば、ルソーによって打ち立てられた根本方針の帰結は、自然人を回復しなければならないということである。自然人、それは、彼がその著『人間不平等起原論』(Discours sur l'inégalité parmi les hommes) の中ですでに使用している表現によれば、「未開」人である。それは、自然と神との本原的なもくろみの中に存在していたような人間である。——というのは、ルソーの宗教観においては自然の背後に神が存在しており、神が彼の哲学的教説のかなめ石だからである。——それは、要するに、もし彼が社会生活と社会の長い腐敗によってゆがめられていなかったとしたら、一言でいえば、自然人であつただろうし、「人間風の人間」ではなかったような人間である。

われわれは、ルソーが間違っているということ、自然の中には善と同じように悪に向かう萌芽があるということ、従って教育は単に親切な補助者にとどまるのではないということ、それは正したり、補ったりする抵抗的な力でなくてはならないということを証明する

のに手間どらないようにしようではないか。むしろ、われわれは、同様に、正反対で絶対的な意見、即ち、自然は本質的に悪であり、その発生の中から汚されており、もっぱら悪へ向かって運命づけられているという意見が、長い間優勢であって、今なお支配権を持ちつづけているということを念頭におこうではないか。そして人間性に対して発せられたこの激しい非難から、子どもの生来の自由を何も認めない禁止と懲罰で充満したとりわけ抑圧で成り立っている厳格で硬直した教育が生じたのである。一つのことを除いて、しつけのあらゆる手段がこうじられた。成功し得たであろうというまさにその唯一のこととは、——よく規制された自由——なのである。ルソーは立ち上って、彼が何人からもその宿命的遺伝を根絶しなければならないと考える墮落した古いアダム概念<sup>3)</sup>に対して、彼は、本能的に善に向かって進み、従って全く自由に発達することになっているという人間性についての正反対の教説を鳴り物入りで対立させるのである。人間の意見の舞台につづいてあらわれる相矛盾する思想運動は、幾分、次のような喜劇を思い起させる。それは、なお一層感情の衝突を露呈せんがために、ある説に固執する対話者に、正反対の説に走るもう一方の人物が抗弁するという喜劇である。どちらも間違っているが、この正反対の意見の衝突がその二つの間によこたわっている真理を明らかにするであろう。自己の声をふりしぼり、弁駁を誇るという危険を冒しても、ある雄弁な思想家が、二千年この方、墮落した人類を繰り返し悲しんできたすべての人々に答えて、人間の本来の力と傾向への確信と樂觀的信頼を証明するということは当を得ていた。即ち、『人権宣言』(Déclaration des droits de l'homme)を公布したフランス大革命の30年前に、ある教育者が子どもの権利とその自由教育権の宣言を出したのである。ルソーは、「常に子どもたちに彼らの義務を語って、彼らの権利を語らないのは間違っている。」と述べている。『エミール』は、いわば、子どもの自由の憲章であったのである。

パラドックスはパラドックスを生み、『エミール』の出発点となっている間違った原理から、一連の教育上の虚妄が生じ、そのためにルソーは非常にきびしく非難されたが、まさに当然な非難でもあった。それは、ニザール(Nisard)<sup>4)</sup>のいわゆるルソーの「大罪」という非難であり、またイギリスの教育者であるクイック(R. Hébert Quick)<sup>5)</sup>の「ルソーのとつぷょうしもない言行」という非難である。

これらの大きな間違いの第一は、少なくとも12才まで、教育は厳格に「消極的」であるべきだということにある。エミールに対する「積極的」な教育は、長い知的無為と同じく長い道徳的無為の後に、やっとはじまるのである。自然は、自ずから目的に向かって進むのであるから、放任しておけばよいのである。『新エロイズ』(la Nouvelle Héloïse)の中で、ジュリーは、すでに教育は「全然何もしないことに」存するという結論を下していた。最良の教師とは、最小限度に行動して、ただ自然の自由な活動を妨害する障害物を取り除き、自然の活動に好都合な状況をつくり出すためにのみ干渉する教師であろう。

教育は、二つの意味で消極的になるであろう。即ち、知育においてと同様に、訓育においても、一方、子どもにどんな指図もしないであろうし、他方、子どもに何も教えないであろう。

それ故、子どもを養育するためには、道徳的な権威も体罰的なしつけも必要ではない。訓戒もいらぬし、少なくとも人間の意志でかせられるような懲罰もいらぬし、またど

んな種類の報賞もいらない。行動の自然の結果としての罰、および犯した誤ちの結果としての罰以外には何らの罰も必要ではない。これはスペンサー氏にも見られる原理である。即ち、「子どもの無分別な欲望に対して、物的障害物以外は、どんな障害物も示すな。」人間の手をどこにも出してはならない。エミールは、自然と自然の力の真只中に放置されなければならない。善悪の知識は、子どもたちのためにはならない。……この種の訓育上のニヒリズムについては、恐らくルソーがその着想を自分の個人的な思い出から引き出したのであろう。

アミエルは、「ルソーは決して服従したことがなかった。彼は思いやりある家庭のしつけも、きちんとした学校の訓育も知らなかった。」と述べている。エミールは、指図など受けないので、服従というものが何であるかも、また不服従というものが何であるかも知らない。エミールは自分自身の意志のほかに、人間の意志が存在し得るなどという考えをもっていない。しかしながら、彼はただ一つの確固たる法則、即ち、可能・不可能の法則にだけは従わさせられる。彼は自然界の法則の権威以外の権威というものを知らないし、事物の厳然たる必然性への依存以外に依存するものを知らないのである。

ルソーが間違っていることを彼に指摘するために、この世で最も自然なものである両親と教師の権威が抹殺されているいわゆるこの自然教育よりも人為的で反自然なものはまさにないと彼に返答することがほんとうに有効であろうか。何に有効であろうか。子どもの行為を方向づけるに際して、母親の愛情によるやさしい取り入りからも、やさしいと同時に確固たる父親の強い意志の命令からも、親切で用心深い教師の説得力ある訓戒からも、もはや何も期待し得ないのであろうか。命令したり取り消したり、盲目的な愛情の極端から残忍な厳格さの極端に走る不手際な両親の気まぐれをしつけから排除することは賢明ではあるが、子どもの道德教育に対して、慎重さと聡明さをもって行使される権威ある行為がもっている恩恵を断つことは何と愚かなことではないだろうか。悪徳が発生するのをさえぎりたまえ、そうすればあなたは美德のために充分なことをしたことになるだろう、とルソーは抗議する。のちほど彼が次のように述べるのと同様に。即ち、間違いと偏見がエミールの心に入り込むのをさえぎりたまえ、そうすればあなたは知識のために充分なことをしたことになるであろうと。いいえ、悪をさえぎるだけでは充分ではない。善を教えなければならない。もしエミールの知性が、12年間磨かれないうまにならなければならぬ。それは、農夫が耕しもしないし、種もまかない原っぱと同じようになるであろう。即ち、雑草がそこに驚くほどたくさんはえるであろう。そしてそれらを根こそぎにしようとするときは、もうおそすぎるであろう。ルソーは『新エロイズ』の中ではよりよい着想を得ていた。その中で彼は次のように言っていた。「善性は磨かれなければならない。……子どもたちは母親に従うように教えられなければならない。」と。

『エミール』にささげた研究であって、われわれが知っている最良である研究の中で、英国人であるモーリー氏 (M. John Morley)<sup>9)</sup>が、権威の原理の脱落がルソーの教育体系の根本的弱点だと述べているのはもっともである。彼は、「この教育体系では、子どもは常に自分自身の判断に従い、自分自身の衝動に従っていると考えざるを得ない。……子どもは他の人の意志の圧迫を感じてはならない。両親や教師は干渉してはならない。……まるで両親が自然の一部ではないかのように。……」と述べている。そしてモーリー氏は次のよう

に付言している。「ところで、何故熟達した行為が子どもの身体的幸福上に引き起す効果のみを自然なものと認め、この同じ行為が人格に吹き込む賛否の感情を自然なものと認めないのか。もし子どもが、自分を取り巻き、愛する人々の感情を自分の考えの中の第一位に置くように早くから慣らされていないならば、最も重要な教育的影響力の一つが失われるであろう。もし、無知と弱さをもっている子どもが、両親と教師のより知的な権威と子ども自身の経験よりもより成熟した経験を自然に尊敬するように向けられないならば、多くのすぐれた性質の取得は危くされないであろうか。」

消極的教育の他の面、即ち、知育の延期に関しても、誤りは同様に重大である。ここで、ルソーは熱狂的になり、彼が自分の生徒に押しつけるいわゆる長い精神的無為の恩恵を大げさに賛美するのである。「教育全体の最も偉大で、最も重要で、最も有益な原則をあえて述べてもよろしいでしょうか。それは時をかせぐことではなくて、時を浪費することである。……読書は子ども時代の折檻である。……学習における見かけだけの才能は子どもたちの破滅である。……私は無知でいる術を教える。……」そこで、本も与えず、口頭のレッスンもしない。エミールは、知的文化をもたないで、ただ自分の身体と感覚だけを行使するかわいい未開人のように成長するであろう。理想としては、エミールができるだけ長く無知のままでいることであり、「自分の右手と左手とを区別すること」さえも知らず12才に達することである。自分の仕事に対して夢中になるルソーは、ユーモラスに誇張して次のように言うであろう。「私は10才の子どもに判断力を要求するくらいなら、むしろ子どもが5フィートの背丈があるように要求したい。……」そしてまた次のように言うであろう。——科学アカデミーが存在しているのをエミールが知っていると仮定して——「エミールは全科学アカデミーを生菓子製造者の店と交換することをためらわないであろう。」と。

疑いもなく、ルソーが推奨する無為で待機的な教育のすべてが非難されるべきものではない。われわれは次の事、即ち、少しも急がないこと、年令に相応した自然な進行を少しも追い越さないのがよいということ、早まった早熟な教育で子どもを疲れさせるのは無謀で危険であるということ、あまりにも早く子どもたちを疲れさせることによって、彼らの力を尽きさせるおそれがあるということ、だけを忘れないでおこう。しかし、恐らく一生のうちで最も実り多い最初の12年間、逆の誤用によって知的能力を開発しないままで放置しておくこの教育体系に対して、何と多数の反論が詰めよっていることか！ ルソー自身が全く決定的となり得る異論を示している。即ち、それは、非常に長い間無為に麻痺させられている精神は、その後活動が不可能になるであろうし、「事物に心をすっかり奪われてしまうであろう」というのである。何も学んだことのないエミールが一挙にあらゆる事を学ぶ意欲と学ぶ能力をもつようになったり、彼の眠っている思考が、彼に欠けているすべての知識を魔法にかかったように習得するために、彼の家庭教師の魔法の呼び声で、突然目覚めるということを、どうして期待できようか。そしてとりわけ、不断の訓練とゆっくりした手ほどきによる知的器官の準備がおろそかにされてきているのに、あらゆる学習で要求されるこの知的器官の適応性や柔軟性がわずかの間にエミールにどうして保証されようか。要するに、もしルソーの語るのが真実であり、子どもがあらゆる抽象的学習に不能であるとするなら、また、もし12才になるまですべての精神活動を禁止する必要があるとするなら、その結果は想像できようか。すべての小学校を閉鎖しなければならないであ

ろうし、人民の教育は不可能となるであろう。

私は、ルソーが書物と教師による授業の代りとして、自然の教育に訴えているのをよく知っている。エミールは、何も暗記したことがないし、書物とは何かということもほとんど知らない。その代りに、彼は経験によって多くの事を知っている。即ち、「彼は自然という書物を読むのである。」まず、われわれは、ルソーが自然に負わせようとする女教師の役割には自然はそれほど適合しないということを指摘しておこう。そして、彼は、彼の生徒の無知の闇を照すことになっている稀な知識を彼の生徒に教え込むために、自ら人為的手段や最も複雑な策略に訴えざるを得ないというのがその証拠である。通常の教育の授業に匹敵するものをエミールに得させようとするなら、苦心して整えられた舞台を準備する道具方を自然は必要とするのである。エミールに初等物理学のいくつかの概念を啓示しようと目論んだ手品師の場面はそのような事であり、また所有の起源についての園丁のロベール（Robert）との会話も同様な事である。疑いもなく、エミールはこのようにして独力で学んだほんのわずかな事柄を比較的充分に知るであろう。しかし、エミールの教育は非常に制限されるばかりでなく、経験と自然からのこの教育はなんてのろいであろうか！よく整備された授業、またはよく選択された読書のおかげで、数時間で学び得たであろうものを、エミールが発見するのに何か月も何年もかかるであろう。教授の明瞭な話し振りが最も若い生徒にも理解させ得ることすべてが、また書物が開花しはじめた知性にもたらし得る光のすべてが、無益となるべきものであろうか。また、働き、思考し、記してきた長い一連の幾世代の人々の相続人になることは、エミールにとっては何の役にも立たないであろうか。幾世紀にわたるこの努力が真理の宝を蓄積し、新来者は学ぶためには、そこから引き出しさえすればよいのに。

さらに、人生の初期に、すべての道徳的なしつけやすべての教訓的な教えを全く抑圧することになってしまう教育体系を非難するのに十分な理由は、ルソーが彼の教育体系を適用するためには、彼の生徒を異常な状況におき、通常的生活状態から解放し、一種の追放状態に彼を孤立させ、見知らぬ人の監督にまかせるために、遂に両親の監督から引き離さざるを得ないということにある。家族の誠実な友であり、使徒であったルソーが——このことについてはわれわれはただちに納得いくであろうが——、彼の教育小説の中で、両親や兄弟姉妹を排除したことに人々は驚いたのである。『新エロイズ』の中で、ジュリの子どもたちが母親の眼下で育てられ、共に遊び共に学ぶのをルソーが描写したあの精巧な情景は、どこにあるのだろうか。ルソーは考えを翻しているが、それは、彼が消極的教育という彼の夢に实际的成就という外観を付与するためには、そうしなくてはならなかったからである。父親にしても母親にしても、必要とあらば、きびしい訓戒によるにせよ、あるいは情愛の深い愛撫によるにせよ、息子に働きかけることを断念するほど、自ら育てようとする息子の教育に無関心になり得るなどということを、実際、どうして想像できようか。自然教育の主人公は、子ども時代には、両親も、仲間も、神も、あるいはまた教師もなしに、ただ一人で生活することがどうしても必要であった。——神のことは、ずっと後、彼が18才になるまでは彼に語られない。また、彼に同伴する家庭教師については、実を言えば、彼は教師でも、教授でもない。彼は単に監視者であり、用心深い番人にすぎない。彼は、外部の影響から、また自然の情け深い行いを妨げ得るあらゆるものからエミールを守

ることを命じられており、それ故、その役割は、彼の生徒のまわりに、いわば隔離の壁をつくることに限られているのである。

ところで、他の人類との交際をすべて禁止するこの奇妙な子どもの隔離は、ルソーが彼の計画の新しさを充分きわ立たせるために必要とした一つの想像的構成にすぎない。われわれはそこに構成上のトリック以上のものをほとんど見ることはできない。そして、著者がその本の多くの箇所では否認している虚構に対して皮肉にふけることは、従って、余計なことであろう。この虚構のばかげたありそうもない事は、彼がそれを教育の通則にしようなどと決して思わなかったことを証明するのに充分である。「私は進むべき目標を指し示す。私は人がその目標に到達し得るものだとは言わない。」この世で家庭教師の機能以外のあらゆる機能を抑圧することになるであろうこの最低の欠陥をもつ教育体系を実現し得るとルソーが本気で考えたなどと、どうして想像することができようか。というのは、人類の半数が20年間教師の職に動員されることになるであろうし、そしてスタール夫人(M<sup>me</sup> de Staël)<sup>7)</sup>が言ったように「せいぜい祖父たちだけは自由に個人的生涯をはじめることになるであろう。」からである。実際、テレマク(Télémaque)<sup>8)</sup>がいるのと同数のすぐれた指導者を見つけなければならないであろう。換言すれば、子どもたちを教育するのにすぐれた教師を見つけなければならないであろう。キリスト教の信仰は、その熱情のあまり、地上と空の間の円柱のいただきで生活を送った風変わりな隠者である「柱頭行者たち」(stylites)を鼓舞した。それは、まるで俗世との断絶の必要性をこのようにはとしようとなあいもない形で示すことを望んでいたかのようにであった。同様に、ルソーの自然主義的な信念は、その目的が自然教育の力を引き立たせることにあった一種の仮説によって、社会から離れて生活し、成長するはずである例外的な人間の発明をルソーに暗示したのである。ルソーが、母親に子どもの乳母であることをかくも横柄に要求し、一度離乳するや、直ちに母親の愛情と心づかいから子どもを引き離すとは全く考えられないことであろう。否、彼は、ただ人為的なわく内で、自分の夢想をほしいままにしてみたかったにすぎない。エミールは実在の人間ではない。つまり、彼は理性の創造物であり、いわば、社会と戦うためにつくられた兵器のようなものである。

結局、ルソーの他の著作と同様、『エミール』の他の編に拠れば、家庭教育はルソー以上に熱心な信奉者を得たことがない。

ルソーは、その『書簡』(Correspondance)の中で何度も家庭生活を繰り返し称賛していないだろうか。1772年付の彼の『ポーランド統治論』(Considérations sur le gouvernement de Pologne)において、彼は意見を変え、新抗弁によって、第三の解決法、即ち共通教育を熱烈に主張しているというのは本当である。ルソーは、相次ぐ意見をかわるがわる同様な激しさで弁護した人である。ポーランド国民に対して、彼は大胆に国民教育の極限、即ちプラトン(Platon)の『共和国』(la République)の教育にまで押しやる国民教育を勧めるのである。この共和国の教育は、人間を市民へと吸収し、個人を徴発して、国家に身心をささげさすのである。ルソーは、一生涯にわたって、個人主義の学説と社会主義の学説との間で、また国家主権と人間の自由との間で動揺したのである。

彼は次のように言うであろう。「良い社会制度とは、人間を最も良く変性さすことができ、人間の絶対的な存在を取り除いて、全く相対的な存在におき換えることのできる制度

である。……精神が国民的形態を付与されるのは公教育によってである。……政府によって定められた規則にのっとった公教育は、すべての民衆政府の基本原理の一つである。……」と。また同様に、『百科全書』(Encyclopédie)の「政治経済」(Économie politique)に関する論文の中で、次のように言っている。即ち「各人の理性を各人の義務の唯一の審判者として放置しておけない以上、子どもの教育を父親の知識や偏見になおさらゆだねるべきではない。……」と。

われわれは、エミールの個人主義的教育から離れており、そしてわれわれは、相対立する意見や激しい矛盾の可変性における無意識的な無造作さをルソー以上にはるかに押し進めるのは不可能だということを容易に認めるのである。だがしかし、それにもかかわらず、われわれは、ルソーの熱望していることを全体として見ると、彼は家庭教育に好意的だと言えるのである。まず、『エミール』のあのすばらしいページを読んでみよう。その中で、ルソーは娘が母親によって養育されることを要求し、またプラトンの教育の妄想を力強く論破している。彼は、「同じ仕事、同じ労働で、両性を混同し、最も耐え難い悪弊を発生させざるを得ないこの民事の混乱に対して抗議している、——即ち、自然の感情によってしか存続し得ない人為的な感情のために犠牲になっている最も優しい自然の感情のこの破壊に対して抗議している、——まるで伝統的なつながりをつくるためには、自然の手がかりは必要ないかのように、また、まるで近親にいただく愛は、国家に負っている義務の原則ではないかのように、また、まるで心が大きな祖国に結びつけられるのは、小さな祖国、即ち家庭を通じてではないかのように、また、まるで良い市民になるのは、よい息子、よい父親、よい夫でないかのように」と抗議している。

恐らく、ルソー自身は家庭の喜びを知らず、家庭の義務を果たさなかつただけに一層家庭という偉大な言葉に彼の想像力は燃えるのである。彼には、男子のためのコレージュ(学院)についても、女子のためのクーヴァン(女学院)についても話すな！ コレージュを、彼は「笑うべき施設」だとして一言のもとに片づけてしまうだろう。——そして、『告白』(Confessions)の中で彼が語っているところによれば、彼がジェジュイット派の憎悪を自ら招いたと考えたのは、このような軽蔑した調子でコレージュについて述べたからである。だがしかし、ジェジュイット派については、彼は用心して「決して良くも悪くも言うまい」と決意していた。クーヴァンについて言えば、プロテスタント国はクーヴァンをもっていないから、カトリック国よりもプロテスタント国の方が優れていると彼は考えたのである。

『新エロイズ』において、ルソーは「あたかも家庭教師が父親にとって代ることができるかのように……」、その子どもたちを見知らぬ教師にまかせてしまう親たちをきびしく非難している。ヴィルテンベルクの王にあてた彼の手紙の中の別のところで、彼は次のように書いている。即ち、「父親の目以外に父親らしい目はありませんし、母親の目以外に母親らしい目は何もありません。私は、すべてのことが両親に依存していると確信していますので、この二行をあなたに繰り返し申し上げるために、何十連もの紙<sup>なん</sup>を当てたいと思っています。……」と。

しかも、人は、『エミール』そのもののの中で、ルソーが哺育に関する限り、如何に雄弁に母親たちを彼女らの義務に立ち返らせたかを知っている。確かに、ルソーは母親をその義務に立ち返らせた最初の人ではない。二世紀のローマにおいて、哲学者ファウリヌス



(Favorinus)<sup>10)</sup>は次のように言った。「自分の子どもを有給乳母にあずけてしまうのは、半人前の母親にすぎなくなることはないのか。……」と。無情な風習や社会の冷酷な言葉とは幸いにも対照的な思いやりのある言葉ではないか。その社会の最も代表的な巨匠の一人であるキケロ (Cicéron) は、紀元前に彼の『トゥスクラヌス談論』(Tusculanes) の中で次のように書いていた。即ち、「子どもが幼くして死ぬとき、人はすぐに締める。子どもが揺籃のうちに死ぬときは、人はさほど気に掛けない。……」と。

『エミール』の出版に先立つ数年間、医者やモラリストたちが同じようなキャンペーンを企てていたが、彼らはあまり熱心には行なわなかった。ルソーはそのキャンペーンに全く熱中した。そしてジャンリス夫人 (M<sup>me</sup> de Genlis)<sup>11)</sup>が次のように述べた通りである。即ち、「知恵なんてものは、熱意ほどに説得力あるものではない。ルソーは、他の人々が言っていたことを繰り返したのだが、しかし彼は少しも勧告しなかった。即ち、彼は命令を下し、そして従われたのである。」と。

母親たちを揺籃のもとに連れもどす際に、ルソーは、単に子どもの興味と子どもの身体的要求だけに没頭したのではなかった。「子どもが乳母の乳を求めているのなら、それは母親の愛情を求めようとしていたのである。」

彼の目には、子どもは、いわば家庭の美德のメッセンジャーであり、夫婦愛の保証のしるしであると同時に保証人である。子どもは、夫と妻を離れないように結びつける神聖な絆である。家庭に子どもの楽しい存在を引き入れる喜びによるにせよ、子どもの教育を負う共通の義務によるにせよ、家庭の暖炉の火を保ち、再び燃えさせるのは、まさに子どもである。ルソーが両親たちに呼びかけている訴えの中で、母親と同様父親も忘れられていない、と。「各自をその第一の義務に立ち返らせようではないか。まず母親から始めなさい。」と言ったのち、彼は次のように付け加えるであろう。即ち、「真の乳母が母親であるのと同様に、真の教師は父親なのである。……父親は言訳するであろう。即ち、いろんな用事や義務があって……というであろう。確かに、一番あとまわしにされるのが父親としての義務だ!……」と。

ところで、ルソーの噴火獣<sup>12)</sup>、即ち、「誇大妄想家の夢想」と彼自身その『序文』(Préface) の中で呼んでいるところのことに——その中にいくつかの真実の粒をさがし、見い出すことをあきらめたりせず——もどるとしよう。消極的教育という幻想に、「継続的」教育という幻想が結びついている。ここで、ルソーは、自然に従うという彼の根本原理を否定しようとしている。実際、もし確定した自然の法則というものがあるとするならば、それは、自然が何物も突然には創造せず、常に緩慢で目に見えないほどの進化によって生起しているということである。ソシュール夫人 (M<sup>me</sup> Necker de Saussure)<sup>13)</sup>は「自然については、人はどこにもその発端をつかめない。自然の創造活動には不意打ちはないし、常に自然は進展しているように思える。」と言っている。この非常に厳密な考えから「前進的教育」というすばらしい体系ができた。しかし、ルソーは別のものを考えた。即ち、断片的で、しかも連続的な三つの時期に分けられる教育を考えたのである。自然が人間の種々の機能をそれらの発達過程で並行して発達させ、従って、教育が種々の精神的・身体的能力の同時的発達に従わなければならないということをルソーは忘れている。それどころか、ルソーは人間の真の統一性を破壊している。エピネ夫人 (M<sup>me</sup> d'Épinay)<sup>14)</sup>は、「それは、まるで子

どもたちが歩行を学ぶ間は、子どもたちに彼らの腕を動かし、手を使うことを人が禁止しているかのようである。」と言っている。第一に、絶対的の二元論によって、ルソーは精神を身体から分離している。「自然は身体が精神より前に発達することを望んだ。」しかし、精神そのものについては、一つと考えずに、彼は三つに分けている。エミールについての作り話の中では、それぞれ根本的に区別され、分離されている三段階がある。12才になるまでは、身体の生活と感覚の訓練である。つまり、知性にも、心情にも、何ものも授けられないのである。12才のエミールは、強壯な動物、即ち機敏な「小鹿」にすぎない。12才から15才までは、知性の時代であり、勉強をするほんの短い時期である。この時期に、子どもは有益な知識の基礎について急速に手ほどきを受け、もはや自然の法則の必然的な力に服することなく、ついに新しい原理である有用性という考えに基づいて熟考し、決定するであろう。最後に、第三の時期だが、15才以降、感情と義務心が非常にゆっくりと現れるであろう。即ち、「われわれは精神界に入るであろう。」と。突然、人間の社会性の形成に取りかかるのである。

以上がルソーの一風変わったプログラムである。このようにして、彼は教育の中に三つの重なった区分、即ち三段階を設定している。そして人は、このように個人を人為的に分離したのち、どのようにして、人間の三つの断片が継ぎ合わされ、また身体と精神で形づくられている一切の自然の統一性を再構成するために結合され得るのかと尋ねるかもしれない。

それでもなお、ルソーの勝手な理論にはいつものように正しい真実の所見の部分がある。彼が、それぞれの年令に相応した特徴に考慮を払うべきこと、例えば、子どもは大人としてではなく、あくまでも子どもとして扱われることを要望しているのは正しい。「あなた方の生徒をその年令に応じて扱いなさい。どんな賢者でも」と彼は言う——そして彼は明らかにロックを指しているのだが——、「子どもたちが何を学び得る状態であるのかを考慮せずに、大人にとって何を知らねばならないかに懸命になっている。彼らは、常に子どもの中に大人を探し求めて、彼が大人になる前に何であるかについて考えない。」そしてまた次のように言っている。即ち、「子ども時代には子ども時代を成熟させようではないか。われわれはしばしば、完成された大人について語られるのを聞いたことがある。では、『完成された子ども』(enfant fait) というものを考えてみようではないか。」と。

これに関して、ルソーは、現代の教育者たちのある人々と一致しないし、彼から最も多く着想を得ている教育者たちとさえも一致しないのである。ロシュの学校の創設者で、非常に熱心に、イギリスの男性的で自由な教育のある部分をフランスにうまく移植しようと努めている革新者でもあるドモラン氏 (M. Demolins)<sup>15)</sup>の最近の著書で最も興味深いものである『新教育』(l'Éducation nouvelle)の中で、ドモラン氏は反対意見を表明している。彼によれば、子どもを大人として扱うのに早すぎるということは決してないのである。彼は、「大人として扱われることによって、子どもはまさに迅速に大人になっていく。」と言っている。そして、彼は9才の子どもの逸話を引き合いに出している。その子は、実際、非常に迅速に、即ち2時間のうちに、大人になったのだが、その理由は、彼の両親と一緒にあるイギリス人の家族に接待されたのであるが、この家族の三人が、この子どもの訪問の間中、この子どもを本気で受け入れ、始終進んで彼と語り合おうとしたというごく簡単な

ことからであったのだ！……

いま言われているように、人間を形成すること、人間を「つくりあげる」ことは、あらゆる時代の、あらゆる国の教育者たちの永遠の夢である。そのことについてある程度まで成功をおさめるためには、ドモラン氏とルソーの両極端な意見の間の中間の道をとるのがよいかも知れない。一方において、子どもに義務について教え、また彼の推理力と思索に訴えて、個人的責任の年季奉公教育をするのに決して早すぎるということはない。——そしてルソーは、この理性の教育にわれわれの知っているような遅滞を生じさせているという点で間違っている。しかし、他方において、——そしてここではルソーの方が勝っているのだが——、子どもは子どもであるということ、判断力が形成されていず、自由も創り出されていない時に、自由人として判断し、振舞うことを要求することはできないということを忘れてはならない。それでも、われわれの二人の教育者は、人々が想像する以上に根本においては一致している。彼らは、どちらも、子どもを抽象的な学習に一挙に投げ入れ、そしてゲーテ (Goethe) の言葉に従えば、子どもを「陰険な哲学者や学者にして、人間にしない」傾向のある早期教育を望んでいない。ドモラン氏は、確かにルソーの次の結論に賛同するであろう。即ち、「一般に行われている教育はよくない。なぜなら、それは古いこんだ子どもと幼い博士をつくるからである。」と。また同様に、道徳教育については、「権威の原理」に基づくしつけをとりわけうらんでいるドモラン氏は、ルソーが明確にすべての権威を排除しているが故に、ルソーの誇張的な表現を称賛せずにはいられないし、また決して早くから十分に「たしなめたり、叱責したり、喜ばせたり、威嚇したり、約束したり、教えたり、説きつけたり」したことの無い両親や教師たちを罵倒するのである。

ルソーの見解に同意することを少しも許されないところは、彼が道徳教育に強いる理解しがたい遅延にある。これは、別の意味で、知的教養の延期よりも有害である。エミールは15才に達したが、彼はどんな人間らしい感情もまだ感じたことがない。彼は誰を愛しているのだろうか。彼が知っている唯一の人、彼の家庭教師を除いては、恐らく誰も愛していないだろう。彼の心は、社会的徳性を準備するどんな子どもらしい愛情に向ってもまだ開かれていない。彼が厳格に個人的な生活の無味乾燥な不毛の隔離状態の中で非常に長い間生活した場合、どんな奇蹟によって彼が突然に人間を愛することを学ぶようになるだろうか。確かに、ルソーは、自分の教育学上の方法の説明をあまりにも簡略化しすぎている。彼は次のように言うであろう。即ち、「エミールはこうで、ソフィーはああだ。」と。彼は、どちらにもあらゆる種類のすばらしい特質と徳性を賦与するであろう。しかし、彼らがそれらを如何にして身につけたかということを、ルソーはわれわれに語ることを怠っている。情愛の深い感情の起りについては、彼が何ら準備していない奇蹟的な結果を当てにしていることは明白な事実である。ルソーは、エミールの心を15年間、空白状態のままにしておいて、そしてたちまち、それを満たし得ると思いつこんでいる。何という思い違いよ！人は計算することを教えるようには愛することを教え得ない。社会的感覚の形成は、微妙で難しい問題である。そしてルソーは、エゴイズムのみの法則にエミールを従わせることによって、問題を複雑にしている。コンディヤック (Condillac) が、一連の微妙な変形によって、本原的な感覚から最も抽象的で最も一般的な観念を引き出していると同様に、ルソーも奇妙な変形によって、最初のエゴイズムのみからあらゆる愛他主義の感情を派生させよ

うとしている。彼の目には、自尊心が感情の唯一の根本的な原子なのである。どうして彼は、人生の夜明けから現われ、そしてその発達をいくら早くから鼓舞し刺激しても早すぎるということはないもう一方の原子である思いやり (la sympathie) を忘れることができたのであろうか。生れたばかりの赤ん坊が自分に乳を飲ませ、自分の世話をしてくれる人に差し向けるほほえみの中には、肉体的要求が満たされるという表情以上のものがある。即ち、母親の思慮深い愛情に対する子どもの生れたばかりの心の動きなのである。「子どもが感官に触れるものにしか注意を払わない間は、彼のすべての観念を感覚にとどめるようにしよう。……」いや、これとは反対に、なお、ひたすらはいろいろと望んでいる感情に非常に広く門戸を開けようではないか。子どもにあつては、少しの魂が肉体にまざり合うことが直ちに必要なのである。

延期熱により、ルソーが道徳的観念の啓示と同様に宗教的観念の啓示を青年期まで遅らせたということは、知られている。ルソーがそれについてあげる理由は次の通りである。即ち、もっぱら感覚的想像力をもった子どもは——そして、もしその子どもがそうであるならば、これはまさに消極的教育の欠陥であるかもしれないが——神について迷信的観念しか形成し得ないであろうし、また神を白いあごひげの老人のような、王座についている王様のような人間のイメージを描くであろう。……神の精神的特質の理想的崇高さで神を一挙に理解しようように、理性の年令に達するのを待ってから神についてエミールに話すのが適切である。ルソーは18才になるまで神の啓示を延期したが、少くとも彼は、神にまといわせる壮厳さによってそれを償うのである。彼は、真心から理神論者であった。彼は魂と未来の生活の存在を信じていたと同様の確信でもって神の存在を信じていた。即ち、「私は、神が存在することを非常に望むあまり、神の存在を信じないわけにはいかない。……」と。ルソーの他の著作にその証拠をさがし求めなくとも、「サヴォワ助任司祭の信仰告白」(Profession de foi du vicaire savoyard) がそれを明白に証明している。彼の見解では、それは『エミール』の主要な部分であった。そのためには、彼は他のすべてを犠牲にしたであろう。この著作の印刷が引き起していた果てしのない不安の中で、彼の敵、特にジェジュイット教徒がそれを消滅させてしまうかもしれないということを恐れて、彼の最も信頼できる友人に保管を頼んでいたのは、彼の原稿のこの部分である。彼に対して今にも爆発せんとしていた宗教的迫害の怒りと嵐の主要な原因となったのは、この部分である。その代りに、ヴォルテールの熱烈な称賛と感嘆まで受けたのも、この部分である。というのは、『エミール』に対して非常にきびしいヴォルテールが、この「馬鹿げた小説」は、それにもかかわらず、「モロッコ皮で装丁されるに値する50ページ」を含んでいると言うとき、彼の言わんとしたのは、「信仰告白」についてだからである。距離をおいてみると、その見事な演出とすばらしい文体にもかかわらず、「信仰告白」は——教育論の余談のようなものであるが——、漠然とした優柔不断な観念論の大げさな修辭的虚飾のようにわれわれには思われる。それに、哲学的著作としての、その固有の価値は大した問題ではない。われわれが「信仰告白」を非難するのは、仮にルソーが実際に自分の生徒に敬虔な感情を発達させようとしても、「信仰告白」は、彼が自分の生徒に聞かせた最初の宗教的な言葉であるということにある。ルソーの考えが実現し得ないということは、議論の余地のないことである。エミールがすべての子どもたちのように、家族の中でそしてこの世界の中で生活

していたなら、彼は両親や同郷人たちの宗教の外面的発願の目撃者となるであろうし、そして彼の好奇心から、すべてその意味するところのものが何であるかを直ちに尋ねるであろう。即ち、彼に神を隠すことは、不可能であろう。しかしそれが問題なのではない。問題なのは、ルソーのとった方法が自分の意図に答えるものであるかどうか、即ち、彼の方法が彼の意図の成功を保証する性質のものであるかどうかを知ることである。私は、その方法はむしろ無神論者たちを生み出すのにすぐれていると思う。非常に長い間、神なしですまさせられてきたエミールは、依然として神なしですまそうという気にならないであろうか。ルソー自身がこれほど内心深くそまってしまうている宗教感情を自分の生徒に伝えようと望むに際して、ルソーはここでもまたゆっくりと発達させることが必要であること、即ちエミールの一時の無神論が、彼のエゴイズムや彼の知的遅鈍と全く同様に決定的になってしまうという極めて危険な状態にあるということに気づくべきであったろう。

この点においても、他の多くの事項と同様に、ルソーは、自然の法則に従うべしという自分の原則に従わなかったのである。そして彼の比喩的な表現方法の一つを借用すれば、人は、言わば「自然」が彼にだいたい次のように話しかけるであろうと想像したい気になられるであろう。

「おお、ルソーよ、もし私が私の主権を回復せんと最も努力した人間の一人をあなたの中に敬意をもって見い出さなかつたとしたら、確かに、私は全くの恩知らずになるだろう。あなたは、自分が私の忠実な僕だと言明しています。あなたの香料は、私の祭壇上で燃えあがりました。あなたは、贅沢な好み、悪徳、社交界生活の錯雑さにまかせている社会の中で、真剣な熱心さで、簡素で質素な生活、いなか風の楽しみ、清浄な風俗を讃美しました。あなたは、正午にしか起床しないでいた人々に夜明を示しました。あなたは、大都會のよごれた空気の中で、衰えていた幼い子どもたちを大気と豊かな日光の中に連れ出しました。あなたは、不自然な要求に対して、また社交界の気まぐれと策略に対して抗議しました。あなたは、原始時代の純朴さを人類に回復しようと努めました。……それらについてあなたが称賛されんことを。」

「しかし、あなたは私からだけ靈感を受けると信じていますが、それにもかかわらず、あなたは如何に多くの点で間違いをおかしたことだろう。私が何ものであるかをあなたが充分に知っているということが私には証明されていません。あなたのまわりの人々は皆んな『自然の法則の神秘について』語っています。あなたは、この神秘に光を投げ、それを見抜いていると全く確信しているのですか。」

「あなたの眼から見て私は何であろうか。『あなたの言によれば、世論が歪曲する以前の人間の本能的諸傾向の総体ということになります。』あなたは、『世論』を部分的に形成したのは私だということを忘れています。即ち、社会は私の事業であり、私が社会を創ったのであり、私が社会組織の中で重要なものなのだというのをあなたは忘れています。あなたの考えでは、私が世界の初期の原始的で野生的な自然の不動状態の中に、凍結されたままにいるように思われます。いいえ、私は不変不動の力ではありません。私は前進し、進歩と共に進行します。あなたに好感をもってはいないが、とても機知に富んでいるある人が、冗談ばく、あなたは人類が四つんばいになって歩き、どんぐりを食べていた野蛮人の時代にまで人類を後退させていると言いました。……私はヴォルテールが誇張している

ことは認めます。しかし、それでもやはり、あなたは、無知の善事を吹聴し、芸術や文学や文明の事業すべてをいみ嫌うことによって、この愚弄に対して論争をいどまなかったのですか。」

「これらの制度や慣習をあなたの祖先たちにたびたび教示したのは私であるのに、あなたは、軽卒にも彼らが設けたものすべてを一掃することを求めています。あなたは、教育においては、万事につけて慣習に反対しようとしています、あなたが一括して非難しているこの『慣習』が、私の統轄する諸法則と一部分でも一致していなかったならば、それは世紀から世紀へと継続することはできなかつたろうということをあなたはわからないのですか。」

「私は、あなたの誤りの細部に立ち入ろうとは思いませんが、しかし誤りの一つは次のようなものです。あなたが、あなたの愛するエミールにただ自然宗教だけを教えるのは当然です。それは、私が是認し得る唯一の宗教です。あなたが、私の背後で私の創造者である神に敬意を表して、儀式の無益で表面的な形式に良心の内的で深遠な感情を対立させたのは当然です。……しかしなぜ、この宗教的教育において、あなたは、私によって導かれ、原始時代の迷信とそれより後代の神学の不完全な光から純粋な理性の一層完全な光へと経過した人類の歩みそのものに従わなかったのですか。あなたの先輩格にあたるフェヌロンは一層賢明でした。彼もまた、私に接近しようとする努力によって、私を楽しませてくれました。もし人間が信者でありつづけることが実際に必要であるなら、彼らの信仰を確実にする唯一の方法は、私が人類のためにしたように、まず、子どもに神についての知覚可能な観念、不完全で混乱した観念を呈示することによって、子どもの心に早期にその基礎をうえつづけることだということをフェヌロンは理解したのです。理性が発達するにつれて、理性は、それらの観念の迷信的なイメージを少しずつ払拭し、人間の弱さが許容する範囲で、私を創造した神の純粋で合理的な概念を現出せしめるであろう。……」

「おおルソーよ、一言で言えば、あなたの大変違い、人があなたを時代の続くかぎり非難するであろう主要な欠点は、——私は未来を予測しているのに——進歩を信じなかったということ、即ち物事の永続的進化という偉大なる法則を推測しなかったということです。あなたは、私の真の特性を知らなかったのです。それは、絶えず運動しているということです。『進歩』(progrès)という言葉が、しばしばあなたの文章の中に現われていますが、あなたはそれをいつも悪い意味にとっています。あなたにとって、その言葉は、頹廃や腐敗の同義語であるか、あるいはほとんどそれに近いのです。……これに反して、あなたの後継者たちは、進歩を私の至高の法、私の重要な原則、人間と世界の存在理由 (raison d'être) と考えるだろう。彼らは、自然が一日で生み出されるのではないということ、遺伝の連続的取得が私の本体の必要不可欠な部分を成しているということ、私が進歩するが故に自然であることをやめないということを理解するだろう。」

「しかし、あなたの誤りが許されんことを。というのは、あなたが私を非常に愛してくれたからです。私を明らかにしたと思っている他の人々もまた、あなたのあとに続くだろう。彼らもまた、恐らく間違いをおかすだろう。というのは、あなたが考えているほど私は単純なものではないからです。私は限りなく複雑であり、また私はそのデッサンが解き得ない、理解し得ない謎のままであり、恐らく、人間はそのデッサンの謎を決して解読するこ

とができないだろう。……」

(訳 注)

- (1) Paul Henri Dietrich, baron d'Holbach (1723～1789). フランスの哲学者。ドイツのエーデスハイム (Edesheim) の大商人の家に生れたが、早くからフランスに帰化し、通常ドルバック男爵 (Baron d'Holbach) と呼ばれていた。父ゆずりの巨大な財力と夫人の内助によってパリにサロンを開き、当時の著名な哲学者や文学者を招き、ディドロ、エルヴェシウス、グリム、マルモンテル、コンディヤック、ルソー、ダランベール、ラ・メトリー、チュルゴなどと交わった。彼らのフランス啓蒙思想を吸収しつつ、彼は宗教と教会とをもって人間の自然的道徳およびそれに基づく幸福の敵と考え、『暴露されたキリスト教』(Le Christianisme dévoilé ou Examen des principes et des effets de la religion chrétienne, 1769)などのなかで、あらゆる形態の宗教に反対し、また彼の主著『自然の体系』(Système de la nature ou des lois du monde physique et du monde moral, 1770)において唯物論と無神論の立場から、人間や社会の不幸は自然に対する無知と偏見から生ずるとし、超自然的な神の力を退けた。さらにまた、彼は『百科全書』の執筆者の一人であったばかりでなく、ジョークールとともに最後までディドロを助け、啓蒙思想の組織者、普及者として大きな役割を演じた。〔著作〕La Contagion sacrée (1767), De l'impoture sacerdotale (1767), Les Prêtres démasqués (1768), L'Esprit du judaïsme (1770), Examen critique de la vie et des oeuvres de saint Paul (1770), Histoire critique de Jésus-Christ ou Analyse raisonnée des Evangiles (1770), Le Bon Sens (1772), Système social (1773), La Politique naturelle (1773), L'Ethocratie ou le Gouvernement fondé sur la morale (1776), La Morale universelle (1776).
- (2) Jean Paul Marat (1743～1793). フランス革命期の政治家。スイスに生れ、1759年フランスのボルドーに行き2年間医学を学び、その後パリに出て勉学をつづけ、1765年ロンドンに渡り医師として生活しながら文筆に従事し、特に『奴隷制の鎖』(The Chains of Slavery, 1774)を書いて絶対主義を批判し、人民抵抗権を強調した。1775年にパリに帰国し、三部会召集前から政治的パンフレットを執筆し、1789年9月12日政治新聞「リュブリシスト・パリジアン」(Publiciste parisien)を発刊し、その数日後の16日に「人民の友」(Ami du peuple)として発刊し、ミラボー、ラファイエットにはじまって立憲議會を支配するフイヤン派、立法議會を支配するジロンド派を人民の立場から監視、攻撃し、民衆の示威運動を鼓吹した。このためたびたび弾圧をうけ、ロンドンに二度亡命した。1792年8月10日事件後、コミューンに地歩をかため、国民公會議員にパリから選出された。共和国成立の前日(1792年9月21日)「人民の友」を廃刊し、その数日後の25日に「フランス共和国新聞」(Journal de la République française)を発刊した。国王の裁判を主張し、処刑後はジロンド派攻撃の先端に立ち、12人委員会に逮捕されたが、パリ民衆の支持によって釈放された。1793年5月31日～6月2日パリ民衆の蜂起にも指導的役割をつとめ、ジロンド派を打倒し、モンターニュ派の権力確立とともに、ロベスピエールとともに同派の指導的地位についた。しかし、1793年7月13日、自宅で入浴中、ジロンド派の同情者であったロンスレの一女性シャルロット・コルデによって短刀で刺殺された。以後革命の殉教者として人民の崇拜的であった。〔著作〕A Philosophical Essay on Man (1773), Plan de législation criminelle (1780), Offrande à la patrie (1789), Projet de déclaration des droits de l'homme et du citoyen, suivi d'un plan de Constitution, juste, sage et libre (1789).
- (3) 人類の始祖アダムが神にそむいて罪を犯した結果、その子孫たる人類もまた生れながらにして罪を遺伝的に負っており、そのために人間は罪惡の傾向をもたざるを得なくなっているという考えで、これは原罪説といわれている。この原罪説は、すでにパウロ(ロマ書、5.12～21)においてみられるが、「原罪」という神学的言葉はアウグスティヌス (Aurelius Augustinus, 354～430) によってはじめて用いら

れ、アダムの墮罪の結果、人間は悪をなす意志をもつが、善はただ神によってのみ意志せしめられるので、神の恩寵によらなければただ一つの善もなし得ないとされる。

- (4) Jean Marie Napoléon Désiré Nisard (1806~1888). フランスの批評家・ジャーナリト。1826年から1830年まで「ジュルナル・デ・デバ」(Journal des Débats)紙の、ついで「ル・ナショナル」(Le National)紙のライターとして熱烈な共和主義者であったが、次第に保守派に転じた。1843年コレージュ・ドゥ・フランス教授, 1851年文部省督学官 (inspecteur général de l'enseignement, 1851~1857), 1857年高等師範学校校長 (directeur de l'Ecole normale supérieure, 1857~1867) などを歴任した。彼の主著『フランス文学史』(Histoire de la littérature française, 4vol., 1844~1861) は、古典主義の立場からのロマン主義への回答である。1850年にアカデミー・フランセーズ会員として選出された。〔著作〕Études sur les poètes latins et de la décadence (1834), Études d'histoire et de littérature (1859~1864), Nouvelles études (1864), Les quatre grands historiens latins (1877), Renaissance et réforme (1877).
- (5) Robert Herbert Quick (1831~1891). イギリスの教育家。ロンドンに生れ、ハロー (Harrow) 校とケンブリッジのトリニティ・カレッジ (Trinity College) で教育を受けた。1855年に牧師補になったが, 1858年この仕事をやめ、ランカスター・グラマー・スクール (Lancaster Grammar School) の校長となり, 1870年ハロー校の教頭, 1874年から1881年までロンドンおよびギルフォード (Guildford) で中等学校の校長を務めた。1881年にケンブリッジ大学で教育史の講義を担当し, 1883年にセッドバーク (Sedburgh) の教区牧師 (vicarage) になったが, その4年後の1887年に辞任した。彼の生涯の最大の関心事は教育であり, その著『教育改革者』(Essays on Educational Reformers, 1868) などにより, 近代の教育の理論と実践の発達を跡づけたパイオニアの一人として教育史上にその位置を占めている。また彼はイギリスにおける教職員組合の発達にも少なからず貢献した。〔著作〕Schoolmasters (1879), Improvement of Teachers (1885).
- (6) John Morley (Viscount John Morley of Blackburn, 1838~1923). イギリスの著作家・政治家。オックスフォードのリンカーン・カレッジ (Lincoln College) に通ったが, 卒業しないで, 1859年文筆家を志してロンドンに出, 1860年ジャーナリストとして仕事を始めた。『隔週評論』(Fortnightly Review, 1867~1882), 『モーニング・スター』(Morning Star, 1868~1870) 紙, 『ペル・メル・ガゼット』(Pall Mall Gazette, 1880~1883) 誌の編集者となり, この間多くの伝記を執筆した。1883年にニューカスル・アポン・タイン (Newcastle upon Tyne) から下院議員に選出され, 1867年以来アイルランドの自治問題に関心をいだき, 第三次および第四次グラッドストーン自由党内閣およびローズベリ自由党内閣のときアイルランド事務相となり (1886, 1892~1895), アイルランド自治法案の制定に努力した。カンベル・バナマン自由党内閣およびアスキス自由党内閣のときインド事務相となり (1905~1910), インド統治に大改革を行った。1910年に枢密院議長に転じたが, 1914年第一次世界大戦の参戦に反対して辞職した。1921年12月にアイルランド自由国成立へのイギリス=アイルランド条約に調印するため議会で復歸した。〔著作〕Voltaire (1872), Rousseau (1873), Diderot, and the Encyclopaedists (1878), Burke (1879), Life of Richard Cobden (1881), Walpole (1889), Oliver Cromwell (1900), Life of Gladstone, 3vols. (1903).
- (7) Madame de Staël (本名 Germaine Necker, baronne de Staël-Holstein, 1766~1817). フランスの女流文学者。ジュネーヴの銀行家でフランス革命直前, ルイ16世の財務総監であったネッケル (Jacques Necker, 1732~1804) を父としてパリに生れた。幼時から聡明で, 少女時代すでに天分を発揮し, ルソーやモンテスキューなどの書物を耽読し, 母のネッケル夫人 (1739~1794) のサロンに集まるディドロ, グランペール, ビュフォン, グリムをはじめとする当時一流の文学者や啓蒙思想家たちに接して成長した。1786年パリ駐在スウェーデン大使スタール・ホルスタイン (Erik Magnus, baron de Staël-Holstein, 1749~1802) と結婚したが, 二年後別居し, 文筆生活に入った。1788年に書いた『ルソーの性格および著作についての手紙』(Lettres sur le caractère et les écrits de J.-J. Rousseau) で文壇に認められた。



フランス革命に際しては、穏和な革命派であって、彼女のサロンにはモンモランシー(Mathieu Félicité de Montmorency, 1767～1826)などの政治家、思想家が集まっていた。1792年スイスのコペ(Coppet)に亡命し、文筆生活を続けた。1795年パリに戻り、サロンを再び開いた。バック街における彼女のサロンは、カバニス(Pierre Jean Georges Cabanis, 1757～1808)、コンスタン(Henri Benjamin Constant de Robecque, 1767～1830)などの自由主義者の中心であった。その熱烈な自由主義思想は、次第に専制的になっていくナポレオン一世の反感を買い、1802年小説『デルフィーヌ』(Delphine)が出るに及んで、パリから追放され(1803年)、ドイツ、スイス、イタリア、オーストリア、ロシア、イギリスなどに亡命生活を送り、ナポレオン失脚後の1814年ようやくパリに戻ることができた。彼女の著作の大半はその間にできたものであり、1800年の『文学論』(De la littérature considérée dans ses rapports avec les institutions sociales)は文学と社会制度との相互影響を考察したもので、近代文学批評史上注目すべきものであり、1810年に印刷しながらもナポレオンの命令によって全部没収・破壊され、1814年に至ってはじめてフランスにおいて出版された『ドイツ論』(De l'Allemagne)は、ドイツ亡命中、ゲーテ、フィヒテ、シラー、シュレーゲル(August Wilhelm von Schlegel, 1767～1845)などと交わり、ドイツの文化や文学に接した成果であり、特にドイツのロマン主義をフランスに紹介したのみならず、フランスのロマン主義文学に根拠を与えたものである。これによって彼女は、シャトブリアン(François-René, Vicomte de Chateaubriand, 1768～1848)と並ぶフランス・ロマン主義文学の二大先駆者の一人として、その位置を保っている。〔著作〕Essai sur les fictions (1795), Réflexions sur la paix (1795), De l'influence des passions sur le bonheur des individus et des nations (1796), Des circonstances actuelles qui peuvent terminer la Révolution et des principes qui doivent fonder la République en France (1799?, 1906年 John Viénot により全文刊行), Considérations sur les principaux événements de la Révolution française (1818), Dix Années d'exil (1821).

- (8) フェヌロン (François de Salignac de La Mothe-Fénelon, 1651～1715) の教育小説『テレマックの冒険』(Aventures de Télémaque, 1699) の主人公の名。
- (9) 連は紙(洋紙)の数量名目で、一連は20帖、即ち500枚(もとは480枚)に当たる。印刷用紙は損紙を入れて516枚を完全な一連としている。ここでは「多量の紙」の意。
- (10) Favorinus (c.80～c.150 A. D.). ローマの修辞学者・懐疑派哲学者。アルル(Arles)に生れ、ローマ、アテネ、コリント、エフェソスなどに住んだ。彼はローマ皇帝ハドリアヌス(Publius Aelius Hadrianus, c.76～c.138 A. D.)の寵臣となり、プルタルコス、ヘロデス・アッチクスを友とした。〔著作〕Pantodapē historia, Pyrroneioi tropoi, Apomnemoneumata.
- (11) Stéphanie Félicité du Crest de Saint-Aubin, M<sup>ne</sup> (comtesse) de Genlis (1746～1830). フランスの女流作家・教育家。シャンプシェリ(Champcéri)に生れ、16歳でジャンリス伯(Charles Brulart de Genlis)と結婚し、1770年シャルトル(Chartres)公爵夫人の女官となり、のちのルイ・フィリップの幼少期の教育をひきうけた。1779年の『教育の舞台』(Théâtre d'éducation)は喜劇短篇集で、彼女の積極的教育の手段であり、1784年の『城館の夜ばなし』(Veillées du château)は教育の代表作で、これは長い間教育の基本とみなされた。フランス革命の勃発とともに家庭教師の役目も終り、1792年からイギリス、ベルギー、スイス、ドイツなどに亡命し、1802年に帰国した。ナポレオンに好遇され、6000フランの年金をうけ、小学校の視学官に任命された。彼女は多筆で、およそ80の著作を残した。〔著作〕Adèle et Théodore (1782), Conseils sur l'éducation du Dauphin (1790), Discours sur la suppression des couvents de religieuses et sur l'éducation publique des femmes (1790), Leçons d'une gouvernante à ses élèves, ou fragments d'un journal qui a été fait pour l'éducation des enfants de M. d'Orléans (1791), Discours sur l'éducation publique de peuple (1791), Les Petits émigrés (1798), Nouvelle méthode d'enseignement pour la première enfance (1800), Projet d'une école rurale pour l'éducation des filles (1802), M<sup>lle</sup> de Clermont (1802), Contes moraux (1802), La Duchesse de la Vallière (1804)

, *Dîners du baron d'Holbach* (1822).

- (12) ギリシア神話の獅子頭羊身龍尾の火を吐く怪獣のことで、妄想や夢の意。
- (13) M<sup>me</sup> Necker de Saussure, Albertine-Adrienne (1766~1841). スイスの女流作家。自然科学者であるソシュール (Horace Bénédict de Saussure, 1740~1799) を父として、ジュネーヴで生れた。スタール夫人のいここにあたる。スタール夫人に対して深い誠実と愛情をいだき、スタール夫人の生活になくてはならない存在であった。スタール夫人と親交のあったシュレーゲル (August Wilhelm von Schlegel, 1769~1845) の『劇文学講義』 (*Vorlesungen über dramatische Kunst und Literatur*, 1804) を1814年に仏訳 (*Cours de littérature dramatique*) した。また Treuttel et Würtz 版スタール夫人全集の第一巻 (1820年) の冒頭に『スタール夫人の性格と著作に関する小誌』 (*Notice sur le caractère et les écrits de M<sup>me</sup> de Staël*) を書いた。〔著作〕 *L'Éducation progressive* (1828)。
- (14) Louise Florence Pétronille de la Live, M<sup>me</sup> d'Épinay (本名 Louise Tardieu d'Esclavelles, 1726~1783). フランスの女流作家。文学を好みパリやモンモランシー (Montmorency) 近郊のシュヴレット (la Chevrette) の邸宅に当時有数のサロンを開いた。彼女のサロンには、デュクロ (Charles Pinot Duclos, 1704~1772), ヴォルテール, ドルバック, グランパール, グリム, ディドロ, ルソーなどの一流の哲学者・文学者が出入りした。とりわけグリム, ディドロ, ルソーなどの保護者でもあった。〔著作〕 *Mes moments heureux* (1758), *Lettres à mon fils* (1758), *Les Conversations d'Émilie* (1774), *Histoire de Madame de Montbrillant* (1818), *Mémoires et correspondances* (1818)。
- (15) Joseph Edmond Demolins (1852~1907). フランスの歴史家・社会学者・教育改革家。ル・ブレ (Pierre Guillaume Frédéric Le Play, 1806~1882) に師事して急進的社会改良主義者となり、雑誌「社会改革」 (*La Réforme sociale*) の編集に従事し、また『中世における市町村運動』 (*Le Mouvement communal et municipal au Moyen Age*, 1875) や『フランス史』 (*Histoire de France*, 4vols., 1877~1880) などを著した。1886年にル・ブレ派の異説者の一派と共に雑誌「社会科学」 (*La Science sociale*) を創刊した。この雑誌は、科学的方法による社会学的研究に捧げられたものである。また、イギリスの社会や文化、教育などを深く研究して、1897年に『アングロ・サクソン民族の優越の原因は何か』 (*A quoi tient la supériorité des Anglo-Saxons*), 1898年に『新教育』 (*L'Éducation nouvelle*) と題する著作を発表し、その内容が国際的にも大きな波紋を引き起した。彼はフランスがイギリスに遅れをとった理由の一つが教育のあり方にあるとし、フランスの中等教育があまりにも古典中心の伝統的諸教科の教授に偏していることを指摘し、近代外国語や実学的諸教科や作業を重視する必要を強調した。そして彼は自己の理想とする教育を実現するために1899年にロシュの学校 (*L'Ecole des Roches*) を創立し、その教育事業に専念した。ロシュの学校の教育は各方面より注目され、とりわけフランスの中等教育改革に一つの指針を与えた。〔著作〕 *Les Français d'aujourd'hui* (1898), *Comment la route crée le type social* (1901~1903), *L'école des Roches* (1903), *L'organisation du travail* (1904), *Les Grandes Routes des peuples* (1904), *Méthode sociale* (R. Pinot および P. de Rousiers との共著, 1904), *Classification sociale* (1905)。

(昭和54年10月31日受理)